

日交研シリーズ A-764
平成 30 年度自主研究プロジェクト
「新しい道路交通システム・施策導入時の社会的受容性」
刊行：2020 年 3 月

新しい道路交通システム・施策導入時の社会的受容性

A study on social acceptance when new road traffic systems and measures are introduced

主査：谷口 綾子 (筑波大学)

Taniguchi Ayako

要 旨

本研究では、(1)自動運転システム(AVs)や Shared Space、超小型モビリティ等、新しい交通モード、空間デザイン概念の社会的受容に必要な条件・プロセス・現状の社会的受容レベルを質的・量的に検討すること、(2)過去に新規導入された交通モードの社会的受容性について、その歴史的経緯を社会学、民俗学視点で整理することの二つを目的とした調査分析を行った。

目的(1)について、第 1 章では AV の挙動や回避性能の信頼度と歩行者の反応との関係を把握するため、AV が単路部無信号の横断歩道に接近する状況を想定し、AV の挙動の違いが歩行者の横断判断へ与える影響を歩行実験を通じて明らかにした。第 2 章では、2018 年 3 月に米国で起きた世界初の AVs による歩行者死亡事故報道が、英国市民の意識に与えた影響について分析し、事故後にリスク認知、技術への信頼、他社の賛否意識認知が有意に変化していたことを示した。第 4 章では、2016-2017 年度に愛知県内で実施された 12 回の自動運転実証実験の参加者に対して行われた意識調査結果を用い、自動運転等に対する知識・理解の差異、AVs への賛否意識・試乗体験による賛否意識変化の要因等の分析結果を報告している。第 5 章では、高齢者の社会的受容に着目し、ドライバーエージェント、ゆっくり自動運転、合流調停支援、指導員型運転支援、歩行支援ロボット、里モビの六つの技術を取り上げ、高齢者がこれらの技術に金銭を支払っても良いと思える条件は何かを検討した。

目的(2)について、第 3 章ではかつての「新」モード「自動車」に着目し、明治から戦前における「子供と交通」の関わりを、新聞を閲覧することを通じて、定性的に把握した。第 6 章では、新技術受容におけるリスクマネジメント・社会的評価・社会や政策の対応を技術史的に観望し自動運転や情報技術のおかれた時代史的状况について述べるとともに、安全と安心、リスクマネジメントに関して論理的に検討し、社会的受容研究の意義を考察した。

キーワード：自動運転システム、社会的受容、新技術、CASE

Keywords: Autonomous Vehicles, Social Acceptance, New Mobility Technology, CASE